

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-11

「無作法なお出迎えをしまい、申し訳ございませんでした。ご到着時間を想定して、今か今かと監視カメラを覗き見していましたので……、車種と品川ナンバーで、思わず飛び出してきてしまいました」と麻里子は安堵したように言って、おちょぼ口から綺麗な歯並びを見せて自分を自分で笑った。

「なるほどー、そうでしたか。はじめまして私は東京支社営業部の」と申します。こちらは社長の辰巳です」と J 課長は辰巳の表情を窺いながら言って、名刺を差し出した。

「お忙しい中をこのような所までわざわざお越しくささいまして、何と申してよいのか、恐縮しております。ご案内いたしますので、あちらでひと休みなさってください」と真紀は名刺を受け取りながら言った。

軽く会釈で応えた辰巳は、時間を超えて紛れもなく女杜氏に一目惚れしていた。

応接室に通された時には、すでに午後 2 時を回っていた。

「酸味がいい塩梅で美味しいですね。この食感は秋映ですか？」と J 課長はリンゴをシャキシヤキと噛みしめながら、さっき仕入れたばかりの情報を臆面もなく口にして尋ねた。

「よくご存じですね」と麻里子は眼で微笑して言った。

「秋の暑さに秋映とは、もってこいの味覚ですね。社長もいかがですか」と J 課長は辰巳に持ち掛けてから、二切れ目を手にした。

眼で微笑する女杜氏の仕草が、催眠術師の指鳴らしの作用を辰巳にもたせかけた。

辰巳は同志社大学のラグビーグラウンドにいて、ラグビー部女子マネージャーの里見美音子と談笑していた。

辰巳が 3 回生になった時、マネージャーとして入部してきた新入生の美音子に一目で恋に落ち惹かれていったけれど、灼熱の恋の物語は恋煩いという名の病魔に侵されて半年で終焉してしまった。

笑顔を大切にしていた美音子は黙ったまま眼で微笑と退部していった。

面影を重ねた中で、特に女杜氏の柳眉が、辰巳の過ぎ去った 30 年余りの時間を巻き戻したのだ。

努めて平静を装っていた辰巳は部下に頷き返すと、動揺を押し隠すように湯飲み茶碗の蓋を元に戻してから、フォークで一切れのリンゴを刺した。

甘酸っぱいリンゴを食べながら、内心恐る恐る女杜氏を間近で見た辰巳は、今初めて彼女が白衣の上下姿だったことに気づいた。

胸元に会社のロゴが刺繍してあった。